

研究班番号【40】  
高津高校の自由と創造とは？

国語班:増田律

## 要約

高津高校の「自由と創造」には「自由と創造」には自分の持つ成長のための機会を理想を実現するために苦難を覚悟して努力を続けて進み続けてほしいという意味が込められている。つまり高津高校の理想の生徒像とは上記の姿勢のある人物であるということがわかる。現在の高津高校ではもともとあった「自由と創造」の意味は忘れ去られているため本来の意味を広めることが高津高校の理想の生徒の育成に必要となってくるのが考えられる。

## 序章

### 第一節「研究動機と目的」

私は一年後期から二年前期にかけて自治会執行部会長をさせていただいていた。一年生後期の1月ごろに新入生を歓迎するために作る冊子である、新入生歓迎冊子を作成したのだが、その中のコーナーで「自由と創造」について自治会長である私が語るというものがあった。その時に改めてしっかりと「自由と創造」について考えたときに自分があまりよく理解していないことがわかった。とりあえず新入生歓迎冊子には「様々な自由な解釈があって良いので高津高校の日々の中で探してください。」といった内容を書いて難を逃れたが、やはり私の中で「自由と創造」についての不完全燃焼感がぬぐいきれなかった。そこで、「自由と創造」の成り立ちについて調べようと考えた。また、それについて調べることで高津高校が理想とする生徒像が浮かんでくるのではないかと考えた。

### 第二節「研究方法」

本研究では高津高校の発行する周年記念誌、および高津高校創立百周年記念に製造されたDVDに添付されたこれまでに発行された高津新聞のファイルから「自由と創造」についての記述を調べ、まとめた。

## 第一章

### 第一節「本研究で使用した書物について」

本研究では周年記念誌と高津新聞から自由と創造についての資料を探したが、理由は以下のとおりである。周年記念誌には三澤校長の当時の卒業式における式辞が一部掲載されていたため使用した。高津新聞第一号に式辞の完全版が掲載されていたらしいが、既に火事によって焼失していた。高津新聞は二代目校長の羽生校長による寄稿が多数掲載されていたため使用した。

### 第二節「自由と創造の成り立ち」

「自由と創造」という言葉は一代目校長の三澤校長によって作られた言葉ではなく、三澤校長が「自由」について式辞で言及し、二代目校長である羽生校長が高津新聞において「創造」について言及した。そしてのちにその二つが統合され「自由と創造」になった。

## 第二章「自由とは」

### 第一節「自由の成り立ち」

三澤校長が卒業生への式辞で自由について言及した。これが今の「自由と創造」の「自由」の元になっていることが考察される。以下は式辞の言葉である。

「自由とは自我の生命の活動領域を指すのである」

「ヨリ大なる自由を有つとは諸君の自我の活動領域の拡張を意味するのである。」

「生々澁刺の自我活動がなかったならば折角諸君に与えられた自由は死んで仕舞うのである。」

「遊惰放逸はこれ自由の死である」

「自由とは又機会の別名である。」

「生の機会であるとともに死の機会である。」

(高津80年史一部引用)

「自由とは自我の生命の活動領域を指すのである」「ヨリ大なる自由を有つとは諸君の自我の活動領域の拡張を意味するのである。」「自由とは又機会の別名である。」「生の機会であるとともに死の機会である。」という言葉から三澤校長の考える自由とは自我の生命の活動領域＝機会であることがわかる。

## 第二節「自由に込められた思い」

「自由とは自我の生命の活動領域を指すのである」

「ヨリ大なる自由を有つとは諸君の自我の活動領域の拡張を意味するのである。」

「自由とは又機会の別名である。」

「生の機会であるとともに死の機会である。」

という言葉から三澤校長の考える自由とは自我の生命の活動領域＝機会であることがわかる。そして、その活動領域を広げることを生徒に望んでいることがわかる。また、

「生々澁刺の自我活動がなかったならば折角諸君に与えられた自由は死んで仕舞うのである。」

「遊惰放逸はこれ自由の死である」

という言葉から与えられた自由(＝機会)は能動的に使わなければ意味がなくなってしまうことを強調していることがわかる。

以上から「自由」とは自分の活動領域を広げるために、つまり自分の成長のためにあり、それを能動的に使うことを理想としていることがわかる。

## 第三章「創造とは」

### 第一節「創造の成り立ち」

「高津新聞」の昭和六年五月十五日に発行された第二十二号に寄稿羽生校長の文章が「創造」の元になっていと考察される。以下は羽生校長によって寄稿された文章である。

『『創造』は遠大なる思想を保持することに始まり、自彊息まざる努力に依つて実現されるものである。理想に燃ゆる者の目は爛々として火の如く輝かねばならず、又常に高所を凝視する事を要する。かくの如くにして、始めて吾等の行くべき大道が開けるのである。道一度開けるに及んでは、敢然として邁進すべく、些かも遲疑逡巡することを許されないのである。而して其進路の途上に幾多の煩惱苦難が横はる事は固より覚悟する所、此時に富つては隠忍自給して自己の保持に力めねばならぬ之をこれ吾等の本領と謂うのである。翻つて静かに吾等の生活を省察するのであろうか。かく考える時に吾等一同は更めて胸深く『高津精神』を喚起し高津健児の本領を固守し以て吾等が伝統の上にさらに光と力とを与えるの覚悟なければならぬ。』

(昭和六年五月十五日発行高津新聞第二十二号一部引用)

ここから大いなる理想を抱き、その理想を実現させるためには立ち止まる事は許されず、苦難を覚悟して進み続けその先で新たな伝統を積み重ねる覚悟が必要であるということを言っていることがわかる。

### 第二節「創造に込められた思い」

『『創造』は遠大なる思想を保持することに始まり、自彊息まざる努力に依つて実現されるものである。』

「敢然として邁進すべく、些かも遲疑逡巡することを許されないのである。」

「幾多の煩惱苦難が横はる事は固より覚悟する所、此時に富つては隠忍自給して自己の保持に力めねばならぬ」

という言葉から苦難を覚悟しつつも自己の向上に努める事を望んでいることがわかる。  
つまり「創造」とは大いなる理想を実現するためには苦難を覚悟して進み続けることであることがわかる。

#### **第四章「結論」**

以上のことから「自由と創造」には自分の持つ成長のための機会を理想を実現するために苦難を覚悟して努力を続けて進み続けてほしいという意味が込められていることがわかる。  
つまり高津高校の理想の生徒像とは上記の姿勢のある人物であるということがわかる。

#### **終章「今後の展望」**

現在の高津高校ではもともとあった「自由と創造」の意味は忘れ去られ、また「自由」の解釈だけが一人歩きして変容していつている。例えば高津高校は自由なので何をしようと邪魔はされないという考え方があるかもしれない。過度に奇抜な髪の色などが良い例である。しかしこれまでの研究結果をふまえると高津高校の「自由」は本来そういった意味ではないことは自明である。  
以上から今後はこの「自由と創造」の本来の意味を広めることが高津高校の理想の生徒の育成に必要となってくるということが考えられる。

#### **参考文献**

高津新聞、高津80年史